

熊本県立宇土高等学校 平成29年度学校評価表

1 学校教育目標
 熊本県教育委員会の「平成29年度県立中学校・高等学校における教育指導の重点」及び「平成29年度人権教育取組の方向」等を中心に据えながら、本校建学の精神である「質実剛健」のもと97年の伝統を継承しつつ、中高一貫教育校として新たな発展と創造をめざす。
 全職員は教育者としての自覚と使命感、教育的愛情と人権感覚を持ち、資質と指導力の向上に努め、生徒一人ひとりの個性を伸ばしながら、知・徳・体の調和が取れ、自ら学び、自ら考え、自ら行動し、たくましく生きる力を備えた将来のリーダーとなる青年の育成に努める。
 中高一貫教育校としての利点を生かし、効果的な教育のあり方を研究するとともに、地域との連携をより一層深め、地域に開かれた特色ある学校づくりに努める。

2 本年度の目標
 ①全職員が、資質と指導力の向上に努め、生徒一人一人を理解し、その個性を伸ばしながら、知・徳・体の調和が取れ、自ら学び、考え、行動する、たくましく生きる力を備えた将来のリーダーを育成する。
 ②中高一貫教育校として、魅力ある教育課程の研究を推進し、宇土校ならではの教育活動を展開する。
 ③地域との連携をより一層深め、地域に開かれた特色ある学校づくりに努める。

3 自己評価総括表

評価項目		評価の観点	具体的目標	具体的方策	評価	成果と課題
大項目	小項目					
学校経営	個性の輝く教育活動の実践	生徒一人一人の活動の場の設定	生徒理解の深化と共有化、達成感100%	日課の改善による生徒と触れあう時間の確保 年3回以上の面談の実施と各部会等での情報の交換	B	朝会を週2回実施とし、生徒との触れあう時間を増した。担任を中心に、生徒面談等積極的に行った。職員間の情報の共有等、大変スムーズに行っている。
			生徒の理解度に応じた学習指導の実践、学習不安による不登校傾向生徒0	放課後、学習指導の時間を確保し、全職員の共通理解のもと活用する。	C	放課後の時間の活用については、一部に理解不足もあって、不徹底な面もあった。
	学校の更なる魅力化	入学者選抜における志願者増	宇土中の卒業生の100%入学、後期選抜における倍率1.5倍	中高連携した生徒理解と面談等、進路指導の実践、高校説明会の実施、中学校訪問等の実施	C	宇土中から他の高校への進学は1人であった。生徒募集において、定員の確保が難しい状況となった。

学力向上	授業の充実と学習意欲の向上	全ての生徒が意欲的に参加する授業の実践	生徒の理解度及び満足度90%の達成	年間授業時数の確保 AL型授業、ICT活用授業の推進 研究授業の充実	B	授業評価を見ても、生徒・教師の授業に対する意識は高まっていると感じる。土曜授業改革など次年度につながる改革案はまとまったが、SSHⅡ期申請と併せて授業改革の中味(探究の問いから始まる授業)の具体的な方策を考えていく必要がある。
	自学力の育成	宅習時間の確保と内容の充実	宅習時間の確保(高1, 2年:週1000分以上、高3年:週1500分以上)	宅習時間調査の充実(年2回一年4回) 授業評価の検証と授業の改善	B	授業評価を通じて各教科・各クラスの現状分析は共有できているが、自学力の育成については、教務として率先して対策を講じているわけではなく、学年や教科に任せているところが大きいので、抜本的な改革のためには教務で具体的な方策を示す必要があるかもしれないと感じている。
キャリア教育(進路指導)	自己の発見とキャリアの基礎構築	自己の強み発見	自身の個性・強みを考えた目標設定度90%以上	適切な課外、模試の計画と実践 年3回以上の面談の実施と各部会等での情報の交換	B	二極化が解消しておらず、生徒が目標を明確にもち、学習習慣の確立と意欲を高める工夫が必要。学年や教科で模試を詳細に分析し、指導に生かす。
		将来を見通したキャリア構想	職業を見据えた進路目標の設定度90%以上	各大学オープンキャンパスへの参加、インターンシップ、進路講話、卒業生による合格体験談	A	オープンキャンパスは積極的に参加するようになった。2学期に1, 2年生で、JAPANE-Portfolioを導入し、新調査書へ対応した。
	一人一人の進路目標の達成	進路意識の向上	進路LHR、進路講話等の満足度90%以上	進路希望調査、進路講話、各種講演会 企業訪問、大学の出前講座	B	理系の文転者が多く、進路学習を計画的に行い、講演や課題研究、大学説明会で得た情報を将来に生かせるような指導、取組を考える。

		進路実績	第一希望合格を目指し、国公立大学130名、難関大学20名合格	適切な課外、模試の計画と実践 模試分析、進路検討会、業者の研修会・模試分析会参加 面談等の実施	C	教員の教科指導力の更なる向上。宅習時間結果、模試分析を関連付けて主体性が育っているかどうかや授業の検証をする。
生徒指導	基本的生活習慣の確立	服装・あいさつ・掃除の徹底	全職員による生徒指導、生徒に寄り添った配慮ある対応の実践、充実度90%以上	指導の全場面での「凡事徹底」 学年集会時の整容指導及びその後の指導の徹底、生活委員会のあいさつ運動の実施 PTAあいさつ運動との連携	B	生徒指導における職員間、学年間の温度差がなくなるような雰囲気を作っていきたい。服装検査の回数については、来年度は学期始めと定期考査最終日に実施したい。あいさつ運動はPTAと連携し、今後も継続していきたい。
		交通ルールの遵守とマナーの向上	交通マナーの充実90%以上、交通事故0	学期始めにおける交通指導、啓発用のチラシの作成と掲示、交通安全講習会の実施	B	交通指導は生徒部、委員会活動により、最近は苦情もなくなったが、引き続き徹底を図り、生徒が加害者にも被害者にもならないよう取り組みたい。
	自主性や社会性及び公共性を身につける	生徒会中心の行事の運営	生徒会主催の行事の企画・運営の充実、達成感90%以上	体育祭、文化祭、クラスマッチの見直しによる内容の充実	B	体育祭、文化祭等については、大変好評で生徒の達成感も高いが、まだまだ改善の余地を残している。
		各種委員会活動の活性化	目標の明確化、生徒自ら動く委員会活動の実践、達成感90%以上	計画的な生徒会執行部と各種委員会との合同会の実施、各種委員会の主体的な活動・活性化	B	今年度、設置した生徒防災委員会の取組や交通委員会の交通マナー指導等積極的に活動している委員会もあるが、全体的には活動状況に温度差がみられる。次年度は生徒会と連携を深め積極的に取り組めるよう考えていきたい。

人権教育の推進	命を大切にすることを育む指導	他人を思いやり、いじめや差別を許さない態度の育成	人権意識、自尊心の向上、自己肯定感90%以上、いじめ0	人権教育LHRや全ての教科において、教師はもちろん生徒相互間でも認め褒め励ます教育活動に取り組む。	C	いじめの件数について高校では5件あった。学校として認知したものは高校1件だった。継続性はないが、学校全体でいじめを起こさせないための環境や教育など予防的取組がより一層必要である。
	職員研修の充実	人権教育の基本的認識の確認と実践力の向上	職員研修の実践、校外の研修に全員参加、人権レポートの全員作成	教育実践の交流等の研修を行い、人権問題に関する深い認識と実践力を併せ持った教職員の集団づくりに取り組む。	A	人権教育の職員研修を校内外とも機会を設け、有意義な研修を行うことができた。職員に人権レポートを書いてもらう教育実践の交流研修の取組では昨年度よりも提出率が向上した。人権問題に関する深い認識と実践力を併せ持った教職員の集団づくりに資する取組ができた。
いじめの防止等	いじめ問題対策マニュアル等の周知	全職員の共通理解と運用	いじめ問題対策マニュアル等に関する職員研修について、有用感100%	ゆうnetを活用した研修の実践、全員の感想を得て返しを行う。	C	「心のアンケート」の生徒の意見から、生徒や職員のいじめ問題防止に対する課題が分析できた。その課題の解決に向けた具体的な実践が求められている。今後、学校全体でいじめ問題の解決に取り組むというリーダーシップと雰囲気作りが重要である。
	いじめ防止対策協議会の運営	全職員の共通理解と運用	全職員による共通理解と外部専門化等と連携した対応の実践、いじめ解消100%	いじめと認知した事案に対する関係者の連携と適切な対応、いじめ防止対策協議会の適切な運営(年3回)	B	心のアンケートの事案については面談等実施し解消できたが、SNS上で起きている事案に対しては見えづらく、指導も手遅れになるケースも多く、情報安全教育が必要である。

地域連携 (コミュニティ・スクールなど)	地域に開かれた学校づくり	学校評議員会の充実	年2回の開催、満足度90%以上	学校評価に関するアンケートの項目の精選、意見交換のための時間確保	B	学校評価と連動した内容になり効率が良くなった。他の分掌での調査資料も合わせて評議員会に提示できるようにする。
		防災型学校運営協議会の充実	年3回の開催、満足度90%以上	避難訓練の回数増と避難経路の周知徹底、人員確認方法等の改善と臨機応変な対応	B	次年度は、各学期1回内容を絞って開催する。1学期(津波)2学期(火災)3学期(防災関連の講演)
		HP・ブログ配信の充実	見やすいHPの作成と充実、HP・ブログともに1日の閲覧200回以上	HPのデザイン・レイアウトの改善、ブログ活用の啓発と徹底	C	HP及びブログ更新は、役割分担が不十分で、充実した運営とはいかなかった。練り直しが必要である。
図書館活動	読書活動の活性化	貸し出し数の増加	生徒一人当たりの年間貸し出し数10冊以上	校内読書月間の実施(7月、12月)特設図書コーナー設置や展示の工夫改善	A	4月から2月までの貸出冊数は一人当たり18冊であった。中学7,832冊(一人当たり30.9冊)、高校3,837冊(一人当たり5.4冊)
	探究活動の拠点としての役割強化	図書館の利用者数の増加	1日当たりの図書館来館者数150人以上	広報誌「らいぶらりいたいむず」の定期的発行、ホームページ及びブログでの情報発信	A	4月から2月までの一日当たりの来館者数は190人であった。図書委員の生徒と共に、利用しやすい図書館の雰囲気作りに努める。
	環境教育の推進	学校版環境ISO取組の充実	環境問題に関する意識の向上90%以上	保健だよりの発行、省エネ(消灯等)の呼びかけ、ゴミの分別の周知	A	保健だよりの発行・安全点検は同程度。保健室での部会で、教育相談、人権教育の主担と情報交換を行ったが、さらに連携を密にしたい。諸問題を分析する組織としたい。

環境教育	学習環境の整備	学習に適した環境づくりの充実	清掃活動に主体的に取り組む生徒増、清掃活動の達成感90%以上	美化コンクールの実施(年2回)、清掃マニュアルの作成と徹底、掃除監督による具体的な指示の徹底	A	新しい取組として外庭掃除用具と保管場所の管理を強化した。水曜日に美化委員がチェック、木曜日～火曜日までに、校内美化チームが補充という活動を継続中。美化コンクール審査組織をより機能化した。ペットボトルキャップ回収参加。
SSH	探究活動の活性化と人材育成	科学的な探究心の育成及び成果発表の充実	学会等の発表率50%以上、新規研究テーマ20%増	大学等、外部機関との連携、全国規模の大会、国際的な大会への挑戦	A	発表率、高大連携率も目標値を大幅に超えることができた。科学部は全国大会入賞及び国際大会ISEFの出場権を得た。
			発表会への外部参加者増、満足度80%以上	本校独自の内容、成果を盛り込んだ企画及び広報	A	1月に研究成果発表会を開催し、外部から約30名の参加があり、保護者の観覧も大幅に増えた。
SSH	グローバル人材の育成	英語を駆使した発表体験増、海外へチャレンジする生徒の育成	U-cubeの利用者20%増、GLP関係の講座受講者20%増	ボードやブックスタンドの設置、広報の充実	A	今年からTED Kumamotoの協力を得ることができ、生徒のGLP関係の参加が大幅に増えた。発表数も約20件にのぼった。
			留学プログラムへの挑戦者20%増	情報の収集及び担任、学年団との情報の共有化・連携	A	韓国研修は世界情勢の不安から中止になったが、台湾の大学との進学提携を結ぶことができた。
	中高6年間の系統的な教育活動の推進	教育内容の研究及び実践	中高合同の生徒理解と支援の充実 進路変更者数の減少	生徒理解研修、教科担当者会を行い、情報の共有化を図る。SCとの連携、別室登校制度等の活用	C	生徒理解研修については、外部講師を招き特別支援教育全般に理解を深めることができた。今後の研修の在り方に大きな参考になった。別室登校の準備については、早急に対応したい。

中高一貫教育			中高一貫した教科指導、進路指導の充実 いわゆる中抜け0	中高一貫の教科研修会、中高一貫の進路検討会の実施	B	中高合同の教科会を実施した。今後定期的に実施したい。 中高の進路検討会についても、連動して内容等の検討をしたい。
	中学校と高校の融合的な活動の推進	合同の行事の活性化、連携した生徒会活動等の実施	体育祭、文化祭等における一体感の醸成 肯定感90%以上	中高一貫の教科研修会、中高一貫の進路検討会の実施 生徒会を中心とした行事の企画と実践、全校集会等でのエールと校歌斉唱等	A	体育祭・文化祭等、生徒の肯定感が高い。体育祭については、授業時間の確保と関連してより良い体制づくりを検討中。 文化祭についても、行事の見直しという枠の中で検討したい。 エール・校歌斉唱については、伝統として継続したい。
			中高の生徒、保護者の一体感のある行事の充実 肯定感90%以上	生徒、保護者ともに参加できる行事の開催、高校生による中学生の支援等の実施	A	保護者の協力があり、大変盛り上がっている。強歩会でも御協力をお願いしたい。 高校生による中学生への学習支援など、取組を検討したい。

4 学校関係者評価

中高6年間を見通した教育活動と高校3年間の教育活動との関連性において、中進生と高進生が互いに認め合いながら育ててほしい。キャリア教育が充実すれば、学習意欲も高まり、宅習時間等も増えていくのではないかと。宅習時間については、課題の質・量ともにバランスを含めて今後、検証して欲しい。また、教員と生徒との対話が充分に行われ、生徒のストレスを緩和する手立て等、確認と検証をお願いしたい。

5 総合評価

部活動や探究活動における全国レベルでの活躍があり、校内でのスーパーサイエンスハイスクール研究成果発表会では高い評価を得た。また、授業改善に積極的に取り組んでおり、生徒の評価も高い。進路目標についても概ね例年どおりの結果であった。生徒の多様化が進む中、中学部、学年団を中心に生徒一人一人に寄り添い対応した。

年間を通して、行事等の改善を進め、職員の負担感軽減に努めるとともに、生徒が学習活動や部活動に集中できるように取組の改善を図った。生徒募集の面で志願者減を招いており、大きな課題を残した。

6 次年度への課題・改善方策

授業の更なる改善と同時に、自宅学習を含めた生徒の自主的な学びをどう展開させるのか、進路目標達成に向けての学習と併せて、生徒が自身の学びをどう構築していくのか、生徒に寄り添いながら丁寧な指導とアドバイスに努める。

中高6年間または、高校3年間の学習活動について、中高合同教科会を中心に、学びの道筋について情報の共有と改善に努める。特に、1学期の学習習慣のある基本的な生活習慣の確立に、中学部、高校学年団を中心に、最優先課題として取り組む。

特別な配慮を要する生徒を始め、生徒の近況等について、関係する部署で連携し、その都度適切な対応に努める。生徒との対応等について、職員研修等を通して教職員の研鑽に努める。

年間行事の改善については、1学期から検討を進め、確実なPDCAサイクルの実践に努める。